

アルバータ州ラクリートの メノナイト共同体について

On the Mennonite Community in La Crête, Alberta

丹 羽 卓*

NIWA Takashi

キーワード：①メノナイト ②アルバータ州マッケンジー郡ラクリート
③低地ドイツ語 ④宗教マイノリティ

論文要旨

2017年夏にカナダのアルバータ州北辺にあるラクリートという村落のメノナイト共同体を訪れ、現地調査を行った。この研究ノートは、まず背景知識として、メノナイトとは何か、なぜカナダに多数のメノナイトのコミュニティがあるのか、メノナイトの人々が従事する主な産業は何かなどについて整理する。その後、ラクリートのメノナイトの人々の信仰、その暮らしぶり、教会生活、母語であるメノナイト低地ドイツ語の使用、その村のメノナイト以外の人とのかかわり、世界各地のメノナイト共同体との交流などについて報告する。当地の行政機関と文化センター訪問、ある教会の牧師とのインタビュー、2つの家庭の訪問、海外のメノナイト支援を行っている団体見学などで得た生の情報から見られるこの地の共同体の姿を描く。

* 金城学院大学キリスト教文化研究所教授

はじめに

カナダのアルバータ州北辺のマッケンジー郡 (Mackenzie County) にラクリート (La Crête)¹ という村落 (hamlet) がある。州都エドモントンから北方に約700 km。東京から青森市までの距離にほぼ相当する。本稿の筆者は空路エドモンドンに到着して、そこからレンタカーを運転して2017年8月にここを訪れた。道路はかなりきちんと整備されていて運転は容易だったが、州道2号線を200kmほど走ったLesser Slave Lake² という湖に面したSlave Lakeという小さな町を抜けて、州道88号線に入った後は交通量が極端に少なく、その後はガソリンスタンドとそれに併設された食料品店が本当に時たま現れるだけであった。道路の両側は白樺林でその奥には広大な農地が広がっているという光景が何時間も続き、シカやキツネが側道を並走するのにも出くわした。前後の視界に車は一台もなく、しばらくするとやっと対向車と出会うということもかなり何度もあった。この道路から離れたところには先住民の集落がいくつかあるはずだが、道路を運転しながら見える範囲には見当たらなかった。もし車が故障したらどうしたらいいのかという一抹の不安を抱えつつ長時間の運転を終えて、休憩を取りながら約8時間かかって目的地に到着。

こうまでしてラクリートという村を訪れたのは、そこにメノナイト共同体³ があると知ったためである。しかもそこでは英語だけでなくメノナイト低地ドイツ語⁴ が日常的に使われていて、それを母語とする一定数の人

¹ この地形が鶏冠に似ていることから、フランス系のRivard兄弟がそれを意味するフランス語のCrêteに定冠詞Laを付けたものをこの地名としたと言われている。なお、フランス語のアクサンシルコンプレックスをつけないでLa Creteと綴ることもあるが、どちらの場合も読み方はフランス語風ではなく、英語風の[ləkri:t]であるので、本稿でも「ラクリート」とカタカナ書きする。

² 北西準州にあるGreat Slave Lakeに対してこう呼ばれる

³ メノナイト (Mennonite) については次節で説明する。

⁴ 現在「ドイツ語」と呼ばれているものは高地ドイツ語のグループに属する。低地ドイツ語のグループの諸言語は、高地ドイツ語よりもむしろオランダ語に近い。

口があるという。この村落を知ったのは、金城学院大学短期大学部文科英文専攻から同大学文学部英文学科に編入し1998年に卒業した渡辺由美子さんを通じてであった。渡辺さんは日本での会社勤務の後ワーキングホリデーでカナダに行き、そこで出会ったカナダ人男性と結婚。結婚相手が小学校の教諭としてラクリートに赴任することになって、それからそこで10年以上を過ごし、今ではすっかり現地に溶け込んでいる。交友関係も広く、今回の調査は、渡辺さんの多大な協力なくしては実現できなかった。

宗教文化的にも言語文化的にも非常に興味深いラクリート⁵という村を訪れるにあたっては、おおよそ次のような問題意識を持って調査にあたった。

- (1) ラクリートのメノナイト共同体の規模、生活様態はどのようなものか。
- (2) メノナイト教会の姿はどのようなものか。
- (3) メノナイト信仰はどのようにして継承されてきて、これからどう継承していくつもりか。
- (4) メノナイトでない地域住民との関係をどう構築しているか。理想的なあり方はどのようなものだと思うか。
- (5) メノナイト低地ドイツ語は日常的にどう使用されているのか。
- (6) 今後メノナイト低地ドイツ語をどう継承していくつもりなのか。

メノナイトは低地ドイツのうち東低地ドイツ語に属するメノナイト低地ドイツ語(Plautdietsch)を話す。それに対して、再洗礼派に属する別の教派は、それとはまた異なる言語を話す。アーミッシュ(Amish)は、高地ドイツ語のうち上部ドイツ語のペンシルベニア・ドイツ語(Pennsylvania German, Deutsch)あるいはペンシルベニア・オランダ語(Pennsylvania Dutch)と呼ばれる言葉を話す。これは保守的メノナイト(Old Order Mennonite)やドイツ・バプテリストが話すのと同じである。それに対して、フッターライト(Hutterite)は、高地ドイツ語のうち上部ドイツ語のフッターライトドイツ語(Hutterite German)を話す。いずれにしても、彼らが英語を使用しつつも、こうした先祖伝来の言語を保持していることが重要である。

⁵ 以下「ラクリート」という場合、狭い意味での行政単位ではなく、その周辺部分も指すものとする。

- (7) メノナイト低地ドイツ語を始めとした学校教育はどうかされているのか。
- (8) カナダあるいはアルバータ州はメノナイトの人々にとって住みやすいのか。
- (9) カナダ政府あるいはアルバータ州政府に求めていることはあるか。
- (10) メノナイトの人々のアイデンティティの基盤はカナダ人である前にメノナイトであるということか。

極めて限られた時間の中での調査であったため、これら全部を調査できたわけではなく、深いところまで踏み込めたわけでもない。それでも非常に興味深い発見が多数あったので、この調査旅行の記録を研究ノートの形で残しておきたい。本来ならメノナイトについてまたメノナイト低地ドイツ語について、さらにはカナダの多文化主義について十分に説明した後に書くべきだが、本稿の性格に鑑み、それは省略している。そうした点についてはまた稿を改めて執筆したい。また、本稿が扱うラクリートのメノナイト共同体はメノナイト共同体の一例でしかなく、かなり伝統的性格を保持していると言ってよい。これがあらゆるメノナイト共同体に当てはまると訳ではないので、その点は注意していただきたい⁶。

1. メノナイト (Mennonite) とは

最初にメノナイトについて簡単に述べておこう。このキリスト教のグループは、16世紀の宗教改革の時代、ルター、ツィングリ、カルヴァンらの改革に飽き足らなかった人々を起源とする「再洗礼派」(anabaptist) と

⁶ 実はメノナイトといっても非常に多様で、古くからの伝統を厳格に守っている集団もあれば、世俗社会の人々とあまり変わらない生活を営んでいる集団もある。それについては、次を参照。Margaret L. Reimer (2008) *One Quilt Many Pieces*, 4th edition, Herald Press, Waterloo, Ont. また次も興味深い。Robert J. Suderman (2007) *God's People Now! Face to Face with Mennonite Church Canada*, Herald Press, Waterloo, Ont.

呼ばれるキリスト教の教派に属する。もっとも、単一で統一された教派があったわけではなく、現在のスイスから低地地帯に至る地域で、さまざまなリーダーに率いられたグループが生まれ、離合集散を繰り返した。さらには、世俗権力と結びついたルター派やカルヴァン派の激しく厳しい迫害を受け、殺害されたり追放されたりした結果、北ヨーロッパ・東ヨーロッパを転々とし、さらには南北アメリカ大陸にまで至った人々も多くある⁷。

離合集散と移動の結果、今日再洗礼派の流れを汲む教派として最大のものが、今のオランダにいた Menno Simons (1496-1561) をリーダーとして発足した「メノー派」であり、一般に「メノナイト」と呼ばれる⁸。

メノナイトの信仰の基盤となる再洗礼派の心情を表明したものとして、1527年の「シュライトハイム (Schleitheim) 信仰告白」⁹と呼ばれる7項目がある。そのうち本研究ノートと関わりの深い3項目を取りあげて、それが当時どのような意味を持ち、メノナイトの人々の行動にどのような影響を与えたかを簡単に整理しておく。

- (1) 自覚的洗礼が信仰の基本であること。→洗礼を受けることはその領民であることを意味した時代には、幼児洗礼が当然とされて

⁷ こうした経緯について日本語で書かれた読みやすい書物として、永本哲也他(編)『旅する教会 再洗礼派と宗教改革』(新教出版社, 2017年)がある。

⁸ 世界中に400万人ほどいる再洗礼派も多数のグループに分かれていて、最大教派がメノナイトで210万人ほど(カナダでは20万人弱)、ドイツ・バプティスト(米国では Dunkers, Dunkards, Tunkers と呼ばれる)が150万人ほど、アーミッシュ (Amish) が33万人ほど(カナダには5000人ほど)、フッタライトが5万人ほど(カナダに2万6000人ほど)いるとされている。

⁹ Wenger, John C. and C. Arnold Snyder (1990) "Schleitheim Confession. Global Anabaptist Mennonite Encyclopedia Online," Retrieved 8 June 2019, from http://gameo.org/index.php?title=Schleitheim_Confession&oldid=143737 (最終閲覧2019年6月10日) また、*Encyclopedia Britannica* の Schleitheim Confession も参照にした。 <https://www.britannica.com/topic/Schleitheim-Confession> (最終閲覧2019年6月10日) この信仰告白に関する論争については、出村彰『再洗礼派 宗教改革派代のラディカリストたち』(日本基督教団出版局, 1970年)を参照。

いた。その否定は、当時の西欧世界の秩序だった信仰属地主義への反逆であった。これは個人の宗教の自由を意味し、さらには信仰の自由と政教分離へと繋がっていく。後にそれが一番はつきりと実現されたのが、北米においてであった。

- (2) 悪魔がこの世に植え付けた邪悪からの分離。→世俗社会から分離するばかりか、イエスの教えに従うために、キリスト教社会からも分離する。
- (3) 非抵抗で武器をとらない。→近代国民国家が形成されるにしたがって国民として軍務につくことを求められたが、これを拒否して迫害された。後に、これが良心的兵役拒否（この場合は「宗教的兵役拒否」の方が適当かもしれない）という制度で認められるようになっていく。

こうしたメノナイトの信念は当時の西欧社会との軋轢を生み、異端視され、厳しい迫害を受けることになった。捉えられて拷問され、さらには処刑や殺害などのひどい仕打ちをされた。その結果、メノナイトは東方のプロシヤ（今はポーランド領）への移動を余儀なくされた。彼らは勤勉で農業上の専門知識を備えていたため移住の地で歓迎されたが、その地で成功すると妬みもかい、約束されていた兵役免除も反故にされた。そのため、18世紀末の1789年ロシア皇帝エカテリーナ二世に招かれ、当時のロシアのウクライナ地方に定住し、20年間の兵役免除を獲得した（その後は兵役免除のための特別税を支払う）。当初ロシアに移住したのは9000人ほどだったが、1870年ごろまでには45,000人に増加し、1914年までには40の入植地（合計12,000 km²。新潟県より少し小さい面積）に10万人が住むようになった。しかしその一方で、中央ヨーロッパでのナショナリズムの高まりを受けて、ロシア政府もメノナイトへの兵役免除特権を許容できなくなり、1870年にはメノナイトのロシア化政策を実施した。その結果、1880年まで

に1万人が米国に、8000人がカナダのマニトバ州に向けて出発した。

メノナイトは移住に際して、事前に代表団を派遣し、メノナイトに特権を与えてくれるよう相手政府と交渉するのが常だった。1874年10月にマニトバ州ウィニベグに到着した代表団が移住先で求めたものは、農地、メノナイトの教会の開設、聖書とメノナイト低地ドイツ語を教える私立学校の認可であった。加えてカナダ政府には兵役免除も求め、実際第2次世界大戦では良心的兵役拒否が認められた。ところが1920年マニトバ州政府は、子どもを公立学校に送らないことに罰金を科す決定を下した。そのため、多くが西隣のサスカチュワン州やメキシコに移住した¹⁰。

さらにサスカチュワン州からその西隣のアルバータ州に移住したメノナイトもあった。アルバータ州へのメノナイトの定住は1893年に始まり、今回取りあげるアルバータ州北部のラクリート¹¹のある地域へは1932年にPeace Riverを使って移動したと考えられている。川沿いのこの地が選ばれたのは、家族だけでなく、家財どころか家畜なども連れての移動だったため、川を使っての移動が合理的だったのだろう¹²。しかし、人里離れたこの地、冬には零下20度以上に気温が上がらず、時には零下40度にまでなる土地をなぜ選んだのか？その理由は、メノナイトがアルバータ州政府と土

¹⁰ ただし、この時メキシコに移住したメノナイトのかなりの割合が1937-41年の4年間にメキシコからカナダに戻ってきた。

¹¹ ラクリートに欧州系の入植が開始されたのは1914年だとされるが、注1で述べたように、この地名がフランス語由来ということから、最初の入植はフランス系だったと思われる。ただ、ラクリートは2011年に75周年を祝ったことから、ここの創設は最初のメノナイト家族が到達した1936年だとされている。しかし、実際にはラクリートにメノナイトがやってくるずっと前から、そこには先住民やヨーロッパ系移民が住んでいたのである。

¹² メノナイトの人々の到着時の様子を移した写真も残っていて、ラクリートのCulture Heritage Centreで見ることができる。なお、ラクリートへの移住はもう少し複雑だが、本論とは直接関係がないので省略する。また、アルバータがカナダに州として正式に帰属するのは1905年なので、この時代州政府の行政能力もそれほど高かったわけではなく、州北辺の村落にかかわってなどいられなかったと想像できる。

地交渉した時、これだけ北に離れていれば、政府が公立学校をつくることはないと思ったからだという¹³。

2. メノナイトの文化と言語

現在、メノナイトは世界82か国にいとされるので、その姿は家庭により、属するグループにより、国によって多様であるが、おおむね次のような点を共有している。

- (1) 多くが農業・林業に従事している。
- (2) 平和を好む。
- (3) 革新的かつ創造的。
- (4) 勤勉で労働を厭わない。
- (5) 共同体志向が強い。
- (6) 近代文明と一定の距離を置く。
- (7) 教会中心の生活。
- (8) メノナイト低地ドイツ語を使用する。

これらの点がどのような社会的効果を生み出しているのかを順に見ていこう。まず(1)にあるように大半が農業や林業に従事しているため、ある程度の自給自足が可能である。ラクリートの周辺も一面が広大で豊かな小麦畑で、そこに至る幹線道路は巨大な丸太を摘んだ大型トラックがひっきりなしに行き交っている。ここで作業するには農業と林業の機械化は不可欠だろうと思われる。近代文明を拒否しては、とうていこの規模の

¹³ しかし実際には、1953年にこの地域最初の公立学校が設立され、それがメノナイトの人々の心配を掻きたて、実際、他の土地への移住した家族もある。1960年代にはボリビアにも移住した。現在では、公立学校が6つ、私立学校が7つある(そのうち最保守のOld Colony系が3つ)。いずれの学校も規模は小さい。なお、この地に電気がひかれたのは1957年であった。

農業と林業を営むのは無理である。野菜畑もあるので農作物を外部から買う必要は低いと思われる。ただし、ラクリートの長い冬は極寒であるので、夏に採れたものを保存しておいて使用するのと併せて、外部からの食糧に依存するしかない。極寒ではあるが積雪量は多くはないので、幹線道路は除雪が行われ、流通は真冬でも確保されている。牧畜もなされていて、何家族かが協力して1頭の豚を屠殺し、解体して肉を分け合うということも行われている。ラクリートの人々は狩猟もするので、銃の保持が認められているため、それを使って家畜を殺すのだそうである。

(2) はメノナイトの平和主義に由来するのであろうが、権力による解決ではなく話し合いによる解決をめざすので、ラクリートには警察官は常駐していない。問題解決を司法に訴えるより内輪で処理する方を好む。

(3) にあるような進取の気質に富むため、迫害の歴史の過程でも未開地を開拓し、(4) にある勤勉さにより、開墾地を豊かな土地に変えていくことができた。その結果、メノナイトは移住した各地で歓迎されたのである。

メノナイトは信仰の自由を追い求める人々であるにもかかわらず、個人主義ではなく(5) にあるように共同体志向が強いのは、迫害の歴史から説明できるかもしれないが、その理由は別途詳しく研究する必要がある。ただ、メノナイトとしての連帯意識は強く、ウクライナなどで困窮しているメノナイトの人々への支援も行っている。またメノナイトの価値観を涵養するための教育機関もある¹⁴。

(6) に書いたように、メノナイトの人々は近代文明にどっぷりつかっているわけではないが、近代文明との距離の取り方はさまざまである。今回訪問したラクリートのメノナイト共同体は、近代生活をかなり受容しており、その中の保守派といわれる人々でも、電気も自動車も使っている。

¹⁴ カナダにはCanadian Mennonite University (マニトバ州ウィニペグ)、米国にはEastern Mennonite University (ヴァージニア州ハリソンバーグ) など5つの高等教育機関がある (cf. Mennonite Education Agency)。

だからこそメノナイト以外の人々との共存が可能なのであろう¹⁵。ただし、ラクリートの中でもリベラルな人々と保守的な人々では生活様式に開きがある。リベラルな人々がメノナイトではない人々とあまり変わらない生活をしているのに対して、テレビやインターネットを使わない保守的な人々もいる。着ているものも、保守的な人々は、手作りの独特の質素な身なりをしており、女性は被り物を常時（家の中でも）身に着けている。逆にリベラルな人々は、インターネットを利用してオシャレな服などを手に入れていて、一般のカナダ人と外見では区別がつかない。ただし、話してみると、メノナイト的な発想の人も多い。（7）にあるように、近代文明にどのような態度をとるにせよ、メノナイトの人々はメノナイト教会中心に生きていると言える。

このように生活様式は非常に多様であるが、それよりもはっきりとメノナイトを特徴づけるものに言語がある。すでに触れたように、彼らの母語はメノナイト低地ドイツ語と呼ばれる言語であり、英語を公用語として使用する社会においても、それを保持し続けている。今回訪れたラクリートの場合も、メノナイトの人々は、必要に応じて英語を使うとしても、家庭内あるいは職場などで使用されるのは先祖伝来の言葉であるメノナイト低地ドイツ語であることも多い。ほとんどがバイリンガルで、英語でのコミュニケーションに何の問題もない¹⁶。

では、言語はどのように使い分けられているのだろうか。La Crête

¹⁵ カナダの他の地には、近代文明と距離を置き、自動車でなく馬車を使うメノナイト共同体もある。カナダのオンタリオ州ウォータールー地方のセント・ジェイコブスにあるメノナイト共同体についての報告がある。次を参照。<https://www.canada.jp/stories/post-804/>（最終閲覧2019年6月12日）なお、今回訪問できなかったが、ラクリートの中心から外れた南の方のブルーヒルズのエリアの人々はさらに保守的で、自給自足中心生活を送り、あまり外部と接触がないと聞いた。

¹⁶ 言語学的に見て、英語と低地ドイツ語は近い言語であるため、低地ドイツ語を母語とする人が英語を習得するのに大きな困難はないと思われる。そのことも低地ドイツ語の保持に有利に働いているのであろう。

Culture Heritage Centre制作のスライドショー“Mennonite History & Culture Overview”によれば、次のようになる。

- (1) 保守的グループ（Old Colony）の礼拝では標準ドイツ語。それ以外のグループの礼拝では英語。
- (2) 家庭や職場ではメノナイト低地ドイツ語（プロシヤにいる時に身に着けた）。ただし家庭でも英語を使う人たちもいる。
- (3) ビジネスの場では必要に応じて英語。メノナイト以外の人とは英語。
- (4) メノナイト低地ドイツ語は近年まで書き言葉がなかったが、2003年になってやっとメノナイト低地ドイツ語の聖書が刊行された。
- (5) 今では讚美歌は英語からメノナイト低地ドイツ語にかなり定期的に翻訳される。
- (6) 今日メノナイト低地ドイツ語を話す人口
カナダ8万人、ドイツ9万人、ボリビア6万人、カザフスタン5万人、メキシコ4万人、パラグアイ4万人、米国1.2万人、ブラジル8千人、ベリーズ6900人、コスタリカ2000人。

3. ラクリートとは

2016年の国勢調査（2016 Census）¹⁷から、ラクリートおよびマッケンジー郡について次の特徴が読み取れる。

- (1) 人口：ラクリートは1860人（周辺を入れると3500人くらい）。ラクリートを含むマッケンジー郡の人口11,171人
- (2) 社会の若さ：マッケンジー郡の人口の34.3%が14歳以下の子供で、

¹⁷ <https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2016/dp-pd/corr/index-eng.cfm>（最終閲覧2019年5月29日）

カナダで一番割合が高い¹⁸。ラクリートは26%。アルバータ州は19%、カナダ全体では17%。

- (3) 15歳以上の結婚率：結婚の割合が高い。ラクリートが64.7%で、マッケンジー郡が64.9%。アルバータ州は50.2%で、カナダ全体で45.7%。逆に、living common law による事実婚の割合はラクリート1.8%、マッケンジー郡が2.7%とかなり低く、アルバータ州の9.7%とカナダ全体の12.0%と対照的である。また、離婚率もかなり低く、ラクリートが1.8%で、マッケンジー郡が1.3%である。一方、アルバータ州は6.0%でカナダ全体は6.2%である。
- (4) 大家族：こどもが3人以上の家庭の割合が高く、5人以上の家庭の割合は、ラクリートが17.9%で、マッケンジー郡が35.4%。アルバータ州は10.0%で、カナダ全体で8.3%となっている。
- (5) 言語：カナダの2公用語のうち使用するの、英語が圧倒的。母語がドイツ語¹⁹と答えた人がラクリートで1,185人、マッケンジー郡で7,105人であるのに対して、英語と答えた人がそれぞれ460人と3,475人となっている。ラクリートでは、ドイツ語を母語とする人口が英語を母語とする人口の2.5倍強、マッケンジー郡では2倍強となっている。ただし、家庭で頻度高く使用される言語となると、ラクリートでドイツ語901人に対して英語705人、マッケンジー郡でドイツ語5,950人に対して英語4,525人と答えており、ドイツ語と英語の差はかなり縮まる。このことはバイリンガル家庭が多いことを意味する。
- (6) 収入：個人の収入ではアルバータ州の平均よりかなり少ないが、

¹⁸ このことは2017年5月3日のCBC Newsで報じられ、注目を集めた。<https://www.cbc.ca/news/politics/highlights-statscan-2016-census-1.4097041> (最終閲覧2019年7月22日)

¹⁹ カナダ統計局の調査では「ドイツ語」という選択肢しかなく、「低地ドイツ語」というものはない。したがって、今回調査対象としている地域では、「ドイツ語」とは「メノナイト低地ドイツ語」だと考えてよい。

カナダ全体と比較すると差は小さくなる。給与所得に限るとアルバータ州の平均よりかなり少ないが、カナダ全体と比較するとそれを上回る。

(7) エスニック起原：ドイツ、オランダが目立つ。

(8) 教育：中学までで学校を終える割合が非常に高く、過半数。男性に至っては6割以上。

ラクリートでも、それを含むマッケンジー郡でもドイツ語を母語とする²⁰人口割合は約63%となっていて、少なくともこの人たちはメノナイトと考えられる。したがって、社会全体がメノナイトの信仰の在り方に強い影響を受けているのは当然である。

4. ラクリートでの聞き取り

ラクリートには、2017年8月22日に到着し、23日と24日の2日間聞き取り調査をした。聞き取り対象者は次の各氏（面会順。ただし、氏名表記はイニシャルだけに留める）。

L. N. 氏（La Crête & Area Chamber of Commerce の Visitor Information Centre）

A. O. 氏（マッケンジー郡事務所の Economic Development Officer）

S. 氏（Culture Heritage Centre）

J. N. 氏（La Crête Berghaler Mennonite Church 牧師）と P. 宣教師

H. Z. 氏 と J. 氏（Care and Share という名の海外支援のためのリサイク

²⁰ 先に述べたようにメノナイトの人々はメノナイト低地ドイツ語を維持しているので、それを母語とする人の数を調べれば、その地のメノナイトの人々のおおよその人数は推定できる。もちろんすべてのメノナイトがメノナイト低地ドイツ語を母語とするわけではないので、その数は概数でしかないというものの、メノナイト以外の人がメノナイト低地ドイツ語を母語とする可能性は極めて低いため、メノナイト低地ドイツ語を母語とする人の数はメノナイトの人口の最低数とみなすことはできよう。

ルショップ店員)

H. K. and L. K. 夫妻 (お宅で夕食をいただきながら話を聞いた)

V. F. and E. F. 夫妻 (お宅で食後のお茶をいただきながら話を聞いた)

以上の人々から聞いたこと、また彼らと交流の深い渡辺さんのコメント、また現地での体験を踏まえると、ラクリートのメノナイトは次のような特徴を持っていると言えよう。

(1) ラクリートのメノナイトの諸教会

J. N. 牧師によると、ラクリートにはメノナイトの教会は19あり、それは次の9つのグループに分けられる。

Old Colony, Summerfelder, Peace Mennonite, Holoerman, Gospel Light, Bergthaler, EMC (LCCF & HCF), 名称不詳の2つ (これについては、インタヴューの中でJ. N. 牧師もあとで思い出したくらいで、詳細を知らないとのことであった)。

名称不詳の2つは別として、これはほぼ保守的グループからリベラルなグループの順である。最も保守的なOld Colonyと最リベラルなEMCでは、メノナイトという信仰は通底しているものの、生活様式はずいぶん違う。教会の姿も違って、ホテルの教会案内のリストにも保守的な教会の情報に掲載されていなかった。これは先に触れたように保守的教会の礼拝ではドイツ語が使用されるのというのも一つの理由であろうが、外部に対してそれほどオープンではないように思える。今回の訪問は日曜日を含まなかったためチャンスはなかったが、保守的教会の礼拝に出席したらいくつもの興味深いことが分かったであろう。ラクリートにもメノナイト以外のクリスチャンがいるが、その人たちは独自の教会を持たず、最もリベラルなEMCの教会に集って。EMCはそれだけオープンだと言える。最初に会っ

たL. N.氏は最もリベラルなグループであるEMCに属しているが、最保守のグループの人々はその教会に繋がっていてこそ救われると信じているようであって、彼にはそれは受け入れがたいと話していた。「信仰のみによる救済」というプロテスタントの基本理念と相容れないからだという。

次に訪問した教会はリベラルなBergthalerに属する教会だったので、J. N.牧師とP.宣教師とのインタビューでも特に違和感はなく、これまで北米で会った敬虔なプロテスタントのクリスチャンと似た印象を受けた。ただ、海外のメノナイトとカナダのメノナイトではないクリスチャンのどちらに親近感を持つかとJ. N.牧師に尋ねたところ、前者の方に親しみを感じるとの答えで、P.宣教師も同意した。いわば、カナダ人であるよりもメノナイトだということだろうが、それは彼らの辿って来た道を振り返れば理解できるように思う。このあたりは一般のクリスチャンと違うところで、リベラルな教会に属する人々でもこうした考えを持っているというのは印象的であった。

夕食を御馳走になったH. K. and L. K.夫妻もリベラルな教会の信徒であるようだった。余裕のある生活を送っているのが、家のつくりや家具・調度品などから容易に見て取れた。筆者が知っている北米のプロテスタントのクリスチャン家庭とよく似ている印象だった。

最後に訪れたV. F. and E. F.夫妻の場合、夫がSummerfelderで妻がOld Colonyという最保守のグループに属する。前日に近所の家族と一緒に豚を4頭屠殺したと話してくれた。Pig butcheringはメノナイトの伝統だとされる。V. F.氏は会社を経営しているが、農園も持っていてほぼ自給自足生活をしている様子。夫人は常時白い被り物をしている。子どもは10数人いて、孫を合わせると40人以上の家族となる。全員が一堂に会した写真を見せてもらったが、巨大な家族である。おそらく裕福なのであろうが、生活はいたって質素な印象を受けた。非常に暖かく迎え入れられ、いろいろな質問にも快く答えてもらえたのが印象的で、とても柔らかなご夫妻であった。

このように、同じメノナイトでも生活様式に違いがある。そしてその後にあるメノナイトとしての信仰にも違いがある。そのため、同じメノナイトでも、グループを越えた結婚をしようとすると、以前に比べれば緩やかになっているとはいえ、緊張関係を生むという（L. N.氏とJ. N.牧師）²¹。このような溝がグループ間にはあるのである。ただし、H. K and L. K. 夫妻との話の中で、夫妻はV. F. and E. F. 夫妻を高く評価しているようだったので、リベラルなグループと保守的なグループの間にもきちんとした交流があるのがわかる。

（2）メノナイトの人々の生活

ラクリートのメノナイトの人々の生活についていろいろな人（その人たちを紹介してくれた渡辺さんも含む）と話をした結果、次のようなことがわかった。

- ・安息日（日曜日）は厳格に守り、仕事をしない。
- ・保守的なグループのメンバーは頭に被り物をし、自分で作った質素な服を着ている。
- ・別のメノナイト集落ではアーミッシュのような近代文明を拒否した生活をしているところもあるが、少なくともラクリートでは電気も車も普通に使える。
- ・インターネットに対してかなり反対意識が強くて、学校では生徒たちはインターネットが使えない。ネット上に子どもの写真が載ることによりかなり抵抗があり、許可にサインをしない人も多い。
- ・同性愛に対して非常に厳しい態度を取り、中南米のメノナイト共同体にある矯正所に送られたりすることもある。
- ・メノナイトの割合が多い小中学校では、毎朝校内放送で、キリスト教の祈りをし、国歌を歌ってそれを締めくくる。渡辺さんの夫

²¹ メノナイトの人とそれ以外の教派や宗教の人との結婚についてはカナダ統計局のデータがあるが、それは別途検討したいと考えている。

の務めていた学校にはムスリムの医師の子どもがいて、両親がそれに抗議したものの聞き入れられず、それだけが理由かどうかは不明だが、結局村を去った。今は別のムスリムの医者が一人居るが、子どもはいないので、同じ問題は起きていない。

- ・子どもには教育の機会は与えるが、本人が望まないなら進学させず、働かせる。

(3) メノナイトの人々の職業

J. N. 牧師の推測では、メノナイトの人々の半数が農民で、3割程度が林業で、あと2割が種々のサービス業ということだった。半分が農民だろうというのは商工会議所のL. N. 氏の見解と合致する。もっとも農業と林業を兼業する人も多い²²。他方、商工会議所の資料からは、色々なビジネスを営む人の数も多いことがわかる。

(4) メノナイトの若者

J. N. 牧師によると次のようになる。

- ・私立学校やホームスクールでの教育も多いが、半分以上の子どもは公立学校に行く。
- ・公立学校の教育内容に問題を感じる場合、私立学校やホームスクールを選ぶ。それらも州の教育方針に沿って教育されるが、メノナイトの信仰に合った内容も合わせて教えられるので、そちらが好まれる。
- ・ラクリートをいったん出た若者のほとんどが戻ってくる。

(5) メノナイトの人々の言語

- ・German School と呼ばれる私立学校も含めてすべての学校の教授言語は英語 (J. N. 牧師)

²² 2016年の国勢調査によると、15歳以上の人口に占める農林水産業従事者の割合はラクリートで男性の12.6% (女性はゼロ)、マッケンジー郡で男性の25.6%、女性の13.8%となっていて、現地の人々の実感とは少し異なる。その原因は現段階では不明。

- ・皆が家庭での言語としてメノナイト低地ドイツ語を話し、メノナイトはバイリンガルになる。(J. N. 牧師)
- ・J. N. 牧師によると、Old Colony と呼ばれる最も保守的なグループを除き、各教会の礼拝は英語で行われるが、時々メノナイト低地ドイツ語も使われることがある。
- ・Old Colony と Summerfelder の保守的な2つのグループの礼拝では、メノナイト低地ドイツ語で説教がなされる。Old Colony では讚美歌と聖書は標準ドイツ語のものを使う。次に述べるように、メノナイト低地ドイツ語の聖書や讚美歌は近年やっと出来上がったからである (V. F. and E. F. 夫妻による。先に記したように、この夫妻は2つのグループの教会に属する)。
- ・メノナイト低地ドイツ語の聖書 (ウィックリフ聖書協会訳)、レキシコン、文法書が21世紀に入ってから出版されたが、メノナイト低地ドイツ語は話し言葉であり、基本的に書き言葉はない。J. N. 牧師もメノナイト低地ドイツ語の聖書はうまく読めないとのこと。それは信仰を語るのに長年の英語からの影響を受けているためだという。
- ・リサイクルショップのH. Z.氏によると、南米からやってきたメノナイトの女性で英語が話せない人がラクリートにいるが、メノナイト低地ドイツ語 (同じではないが) でコミュニケーションをとることができる。
- ・メノナイトの標準ドイツ語の新聞がマニトバ州で発行されている (V. F. and E. F. 夫妻が購読している)。

おわりに

本研究ノートは、カナダのアルバータ州北辺のラクリートにあるメノナイト共同体について記述したものである。したがって、北米に多数あるメ

ノナイト共同体のわずか1例の記述でしかなく、メノナイトの包括的研究とはほど遠いのは言うまでもない。しかもわずか数日の滞在でしかなく、到底十分な調査ができたはずもない。しかし、これまでメノナイト共同体の具体的生活について日本語で紹介された文献は少なく、英語で書かれたものもあまりない。この研究ノートが1つの手掛かりになればと願っている。

カナダ研究においてキリスト教系の宗教マイノリティの研究はほとんどなされていない。イスラームをはじめとして近年の移民がカナダにもたらした宗教の研究は、移民の社会統合が喫緊の課題であるため積極的になされている。それに対して、キリスト教系の宗教マイノリティがキリスト教以外の宗教マイノリティほど注目を浴びないのは、受け入れ社会との間にそれほど大きな軋轢をうまないからであろう。しかし、歴史的には宗教的兵役拒否の問題があったし、2003年アルバータ州のフッタライト（再洗礼派に属し、メノナイトと近い）が、運転免許証の写真を拒否し、法令の無効を訴えた。この訴訟に対して、1審と2審はアルバータ州の法令は憲法違反との判決を出したが、2009年にカナダ最高裁判所はアルバータ州の法令は憲法違反でなく、フッタライトもそれに従うよう逆転判決を出した²³。この例が示すように、キリスト教系宗教マイノリティも主流社会と軋轢を生む可能性はある。彼らがもつ厳格な宗教的信念と近代社会はどのように調和させられるのか。

本研究ノートの筆者は、メノナイトそのものを研究対象とするというより、多文化主義を憲法に定めるカナダという国家において、宗教マイノリティがどのように生きているのかということを見るために、メノナイトを取りあげようと考えている。

²³ 次を参照。CBC News “Hutterites need driver's licence photos: top court,” July 24, 2009, <http://www.cbc.ca/news/canada/hutterites-need-driver-s-licence-photos-top-court-1.791700>（最終閲覧2017年9月4日）

実際、この研究ノートはほんの手始めでしかない。今回の調査でメノナイト共同体の信仰や生活について垣間見ることができた。これを第一歩として、多文化主義カナダにおけるキリスト教系宗教マイノリティの研究を進めて行きたいと考えている。